東日本大震災救援ニュース

No.13
2011年3月29日
にじのネットワーク・対策本部

第３次医療支援隊・現地活動報告

第３次医療支援隊は、現地にて、４人とも別行動になり、それぞれの専門性（医師、看護師、介護福祉士）を活かした医療・介護支援を進めています。メディアでも報道されていますが、地震や津波でなんとか倒壊を免れた家屋で避難している被災者、慢性疾患患者さんで高血圧や糖尿病、心臓病といった定期薬が津波に流され何もなく服薬できずに急性増悪、高齢者の避難暮らしに介護支援が行き届かずになってしまっている方も多くいます。こうしたさまざまなニーズに応えるために、それぞれの専門性を活かすような支援活動を展開しています。

宮城医師は最大避難所のリーダー
阪上師長、石川看護師は長町病院
堀介護福祉士は宮城野の里へ支援

＜宮城医師の報告＞

こちらは最大避難所のリーダーをしています。今日は患者さんマップを作成しました。看護師さんとゆっくり話をしながらできることを模索しています。

１人暮らしのおばあさんがシカゴにいる１人娘に消息を伝えたいことが聞き出せて施設の電話を借り国際電話をかけることができました。おばあさんも、シカゴの娘さんも大変喜ばれていました。

＜阪上師長、石川看護師の報告＞

坂上師長と石川看護師は長町病院に移りました。坂総合病院もそうでしたが、思っていた以上に支援物資に恵まれていますが、輸送手段に困っており、どの地域に何が必要なのかがまだ充分に把握しきれていないようです。

長町病院では地域訪問も始めています。（坂総合病院には離島からの支援要請も入っていました。）地域を分けてしらみ潰しにあたられているようです。

慢性期病棟では震災後また何があるかわからないということで急遽3交替を2交替にして3人夜勤をされています。しかし、介助の人が多すぎて夜のオムツ交換だけで1時間半近くかかりました。「市民病院が急性期しかとらないので慢性期の患者さんや介助のいるお年寄りが長町に流れてきている」と現地の看護師さん。患者さんの中には、入院中に被災して自宅がない方もおられますが、明るく前向きな印象でした。

しかし被災を苦に自殺をされた方の話も聞きました。私達に出来ることは本当に限られており、支援しているというより、支援されている感を強く感じます。尼崎医療生協が同じ立場にあったらどんなふうに支援を受け入れる事ができるだろうか、そればかり考えます。

坂総合病院では、避難所まわりをコーディネートされている消化器内科の女医さんは2人の小さな女の子を膝に抱きながら遅くまで、作業を続けています。皆さん明るく頑張っておられます。とにかく自分に出来ることを一つずつやっていくしかないなあと思い、明日に備えて寝ることにします。

長町病院の支援継続。併設されているクリニックは内部がほぼ壊滅状態で、昨日までは慢性期の臨時病棟がありました。現在、支援者は全て日勤業務の支援となっています。

阪上師長は5階、石川看護師は4階での支援となっています。同じ病棟とのことですが、情報交換が出来ていないのが現状です。回復期のリハ病棟で、オムツ交換や移乗介助、食事介助、経管栄養が中心で多忙感は正直乏しいです。受け入れ側の戸惑いがあるのではないかと思われます。

ほとんどの県連が 3～6 日の短期間支援でスタッフが交代要員になれない現状があります。そうした点から、病棟業務の特殊性から1ヵ月単位での長期の支援が望ましいと思われます。

支援者の宿泊場所はテレビ、水道、電気、ポット、炊飯器、電子レンジまであり、シャワーも使用できます。また暖房もあり、炊き出しも支援物資も充実しています。思っていた環境と全く異なり非常に充実しています。色々もどかしい気持ちもありますが情報発信も含め、今私達にできることを勤めていきたいと思います。

＜堀介護福祉士の報告＞

堀介護福祉士は、「宮城野の里」支援。宮城野の里はケアハウス、ショートステイ、デイサービス、地域包括からなる介護総合施設です。そのうちケアハウスの食堂を開放して被災者の避難場所として提供されています。

またショートステイも定員 20 名のところ、33 名と定員オーバーで支援を行っています。デイサービスの利用者も帰る場所がなく、お泊りデイ化しているのが現状です。

施設周辺は浸水の傷跡が痛々しいですが、施設は震災の被害はほとんどありませんでした。

今日は避難場所であるケアハウス食堂を中心にショートステイを行き来しながら支援活動を行いました。まだまだこの地では介護支援のマンパワー不足を強く感じました。

全日本民医連、 被爆対策本部を立ち上げ

◇緊急被曝対策本部 福島民医連各事業所と南相馬市を訪問！◇

全日本民医連は、福島第一原発の重大事故に対する「被爆対策本部」を立ち上げ、福島に入りました。

3月27日、福島民医連事業所の状況把握と支援、さらに福島第一原発から半径10～30キロの範囲にあり屋内待避・自主避難という複雑な状況に置かれている南相馬市への訪問を目的に、小西副会長、長瀬事務局長はじめ緊急被曝対策本部のメンバーが2班に分かれて福島入りし、その後、県連、法人の幹部と懇談しました。

福島の職員は、自らが被災者でありながら、民医連や医療福祉連の物資支援、さらにはOB などの人的支援を受けながら懸命に奮闘しています。わたり病院は南相馬の大町病院の透析患者を30人を受け入れています。

南相馬市を訪れた長瀬事務局長や松本県連会長は、義援金を渡し市長と懇談しました。市長からは、政府の方針の曖昧さと風評被害により、7万人市民のうち、5万人以上が待避、物資も郵便物も入らないなど陸の孤島と化した中、全日本民医連や福島県連に対し、「残された市民の命・生活を守る具体的な支援を」と要請されました。医師会長も「市民を放り出すわけにはいかない」と1人戻り、診療所（産婦人科）を開始していました。避難所では家族の安否確認すらできない厳しい状況を聞きました。

こうした状況を踏まえ福島県連として支援方針を早急に定め、必要な支援を全日本民医連に要請して頂くことを確認しました。

＜全日本民医連情報＞

支援者到達（28 日現在）:1,163 人（医師229人、看護師361人、事務336人）

支援募金：5,900 万円突破！

尼崎医療生協グループの義援金 430 万円に到達！